

はじめに

橋爪大三郎

ウクライナ戦争が始まった。

プーチンの命じた、「特別軍事作戦」だ。

西側世界の人びとは、おどろいた。まさかと思った。でも、二〇二二年二月二四日を境に、世界は変わってしまった。

ウクライナ戦争は、マグマのように、世界の見えないところに隠れていた。ある日それが噴出し、この世界の現実の一部になった。人びとは、この新しい貌かおをした世界と向き合わねばならない。

*

人びとはなぜ、おどろいたのか。

それは、自明だと考えていた前提が、あっさり崩れ去ったから。自由と人権と民主主義と、資本主義と法の支配と、言論の自由と選挙とナシヨナリズムと。世界は、陽ひの当たる西側の世

界を中心に回っている。それ以外の場所にも少しずつ、陽は射し始めて^さいる。世界はだんだんましな場所になっていく。——そういう思いを共有しない、異質な他者がいる。もしかしたら、この世界の本質は、その異質な他者のほうがよく見えているのかもしれない。

それならば、西側がこの戦争に勝てばよい、という話ではない。

大事なのは、この世界に隠れている、マグマのありか突き止めること。そして、実はもう始まっている、「ポスト・ウクライナの世界」を見極めることだ。

*

ポスト・ウクライナ戦争の世界の全貌が明らかになるには、もう少し時間がかかりそうだ。

アメリカは覇権を失って凋落^{ちようらく}し、中心のない多極世界となるだろう。

中国が巨大なプレーヤーとして、わがもの顔でふるまうだろう。

インドも存在感を増すだろう。

国連は機能せず、紛争が続発するだろう。

旧大陸の文明や伝統が息を吹き返し、堂々と存在を主張し始めるだろう。

はつきりした見通しと哲学がないと、自分がどう歩むか、針路を見つけられない。

*

本書は、そんなポスト・ウクライナの世界を掘り下げる対談だ。

大澤真幸は、社会学をベースに、哲学や思想から現代のアクチュアルな課題までを、縦横に論じる。

私（橋爪大三郎）も社会学をベースに、遅れじと喰らいつつしている。

対談の醍醐味は、できかけのアイデアが、触発されてかたちになることだ。その生成の現場を味わっていただければ、と思う。

*

ポスト・ウクライナの世界。主役たちに圧されて、日本に果たして出番があるのか。

出番がなければ、つくればいい。

これまでの思考の枠組みが溶解する。新しい哲学が必要だ。

アメリカは、哲学が苦手だ。西側のこれまでの哲学は、そのままでは使えない。

日本には、そのヒントがごろごろある。才能のある若い人は、アカデミアを志し、世界と人類のために頭を使いなさい。日本の出番があるとすれば、学問の新時代をつくり出すことだ。

ビジネスや政治や教育の根底には、哲学がある。その哲学に投資しよう。若い才能を育てるために、みんなで哲学の本を読もう。ポスト・ウクライナの世界と渡り合う、いちばんの正攻法である。

本書が、そのきっかけになることを、切に願う。

目次



2022年4月24日、東方正教会の復活祭。キーウ(キエフ)の
聖ミハイル大聖堂で祈るウクライナ軍兵士 写真：AP/アフロ

第一章 アフガニスタンとアメリカの凋落

急転のアフガニスタン情勢

なぜ共和国政府は崩壊したのか

アフガニスタンとは

大川周明の仕事

「大東亜」とは

イスラムをどう考えるか

アメリカの戦略転換

アメリカはちくはく

西側バイアス

ネイションがない世界

誰が国民なのか

イスラム主義は現代的

イスラムはなぜ連帯できないのか

難民は北に向かう

ナシヨナリズムが退潮して

ネイションは法人

ネイションが抜けているイスラム圏

なぜファンダメンタリズムなのか

ファンダメンタリズムとはなにか

理解のための補助線は皇国史観

ファンダメンタリズムのみかけ

ファンダメンタリズムとネイション

タリバンの奇妙な批判

タリバンの統治能力の根拠は紛争解決

第二章

ウイグルと中国の特色ある資本主義

タリバンと工藤会

誰がタリバンなのか

諸国のタリバン詣で

忘れられた地域

文明的な文脈

文明／伝統の順接と逆接

資本主義と民主主義

権威主義的資本主義

中国流の発展は勝負手？

集権的で多元的

世界システム論と中国

資本主義にはふたつある？

中国は安定しているのか

イングランド国教会のタイプ

フランスは哲学を輸出する

アメリカ版の資本主義

「中国の特色ある」資本主義

中国経済発展の秘密

革命的ロマン主義の功罪

資源を共産党が動かす

改革開放はやり直しの大躍進

自由化運動は起こるか

中国共産党は無謬か

共産党はなぜ正しい

天安門事件はまたあるのか

中国の指導部の考えを変える

自信を失う西側世界

自由は普遍的価値なのか

第三章

おどろきのウクライナ

日本は覚悟を決めるとき
台湾有事をどう戦うか
どんな価値のために戦うか

味方を増やす
ロシアの行く手を占う

ウクライナという国
ギリシャ正教は政教一致
ウクライナには核があつた
ウクライナのアイデンティティ
ロシアとはなにか
誇大なイマジネーション
プーチンの主権国家
大国ロシアの戦略
ヨーロッパ台頭の歴史的道筋
旧大陸の逆襲
ロシアと中国

スターリンがプーチンのモデルなのか
秘密警察とはなにか
遅れたロシア
ソ連時代の遺産
西欧コンプレックス
あこがれの正体
合理性を超えた決定
傀儡政権の悲喜劇
この侵攻は電撃作戦なのか
プーチンと軍の齟齬
ヒトラーとの違い

第四章

もつとおどろきウクライナ

ロシア軍は起ち上がるか

ヒトラー暗殺計画

EUと隣人愛

隣人愛のファンタジー

不可解なロシア軍

この戦争を歴史のプラスにできるか

ロシアの反戦運動はごく一部

変わる世界地図

戦争から見えてきたこと

ウクライナのナシヨナリズム

歴史のターニング・ポイント

日常化する非日常

NATOの性格

ナシヨナリズムと戦争

ロシアのプライド

ロシア文化の深い根

戦争理由を偽装する

ロシアは、ヨーロッパじゃない

敵ならナチズム

ヨーロッパはなぜヨーロッパか

ロシアはなぜネイションでないのか

キエフ・ルーシの選択

西側こそ特殊であった

二重底のナシヨナリズム

東側の民族意識

西と東の分断線

ロシアという場所

資源をどう配分する

第五章

ポスト・ウクライナ戦争の世界

ふたつのナショナリズム

例外的な世界システム

戦争はなにを隠蔽するか

普遍的な理念は欺瞞なのか

ウクライナ側の新兵器

ドローンは殺人ロボット

弱かったロシアの軍隊

核は切り札なのか

核は大国の証か

MADとNUTS

ウクライナ支援と石油・天然ガス

戦争と石油禁輸

石油禁輸のプラス面

経済を上回る価値

二の足を踏んでいるのか

意地悪に理があるか

ほんとうの試金石

冷戦が終わってなにか終わったのか

大国としてのプライド

負けるということ

ふたつの敗戦

ロシアを動かす論理

ロシアの自己イメージ

ロシアの野望

プーチン政権の命運

ロシアという問題児

国連の再生

ロシアにつける薬

ロシア非難決議を棄権する国々

アフリカやラテンアメリカの

国々はなぜ棄権したのか

ワグナーの暗躍

グローバル経済の残酷

第三世界を代表できるか

これは搾取なのか

挑戦者は誰か

挑戦者は中国か

負け組の逆襲

資本と資本主義

戦時経済だったのか

赤い資本主義なのか

豊かな国への切符

アセモグルの仮説

旧約聖書は反権威主義

議会があるから専制でない

権威主義に反対、は絶対か

ロシアと中国の違い

ロシアと中国は背中合わせ

ロシアを必要としない中国

中国経済発展の秘密

中国共産党、統治の秘密

中国はキャッチアップ経済か

共産党の権力基盤

中国はトップが定位置

中国の「文明的定数」

二一世紀型の資本主義

「歴史の終わり」のチャレンジャー

ロシア、イスラム、インド

中国だけ葛藤のタイプが違う

世界が戦国時代に見えている

群雄割拠と統一帝国

いつのまにか朝貢

中国の戦略は矛盾している

中国とは付き合えない？

自由と平等はなぜ説得力がないか

モダニズムに立とう

キリスト教もいろいろある

中国のビジネスモデル

ロシアを支えるポストモダニズム

自由と平等は、なぜうまくいかないのか

権威主義は「反社」である

中国の資本主義に外部から文句は言えない

中国の資本主義は首狩り族か

西側は中国に寄生している

デカップリング待ったなし

共産党がないという誇り

中国はおぞましい鏡像

軍事衝突になる覚悟

ポスト・ウクライナ戦争のアウトライン

インドは中国の逆像

ポスト・ウクライナ戦争の新世界

おわりに 大澤真幸

主な参考文献